

# 自閉症児のコミュニケーションについての一考察

高 田 隆

## 概 要

自閉症児は、人とのコミュニケーションをとることが苦手で、コミュニケーション障害であると言われる。しかし、一年間でも自閉症児とともに過ごし、各自の個性が明らかになると、彼らは言語表現こそ不得手であるが、動作などの非言語性のもを含めた意思の投げかけの頻度は、健常児とあまり差がないと感じる人は多く、実際にその通りである例は多い。一般的に自閉症児は器質的には発声・発語が可能とされている。個人差が大きいとはいえ、心の中に内在する言語をいかに発声させるか。この方法について保育・教育現場では様々な試行錯誤が繰り返され、個別もしくは集団によるアプローチが確立されてきた。過渡的な方法として絵カードなどの補助・代替的なコミュニケーションが用いられ、功を奏する例も増えている。

今回は主に文部科学省の研究指定校で多くの自閉症児が在籍するA学園の指導事例を考察し、その指導段階を明確にしていく。ここでは、最初は彼らの発するコミュニケーション行動のすべてを受け入れ、徐々に個人能力に応じて、言語的なコミュニケーションに発展させていく。

言語の顕著な発達は、自閉症児の生活全体を豊かにすることによって、さらに「言語を話すことが必要な環境設定」によって実現の可能性が増す。そして、周囲の大人がコミュニケーションマインドを持ち、きめ細かな反復性のある指導を行うことが重要である。

## 1. 緒言

「コミュニケーション」とは通信、伝達を意味する。また、「意思が相手に伝えられ、その結果、相手の態度や行動に影響を与える作用または過程である。」と先行文献などにあるが、自閉症児が言葉にならない声や動作で発信しても周囲がそれに気がつかないことが多くある。しかし、父母や担任など常に身近にいる人間はそれを見逃さない。そのことは自閉症児にとっては好都合なことだが、自閉症児がきちんと発声・発語しなくても先回りして色々補助、介助をし過ぎてしまうと本人が言語の必要性を感じなくなってしまうという人間本来の習性が働くので、接し方における配慮が必要であることは言うまでもない。また、自閉症児は、固執しているフレーズの独り言を言うな

ど言語を通信の手段にしないことが健常の子供よりも多いことが報告されている。

コミュニケーションには大きく言語的コミュニケーション(バーバル)と非言語的コミュニケーション(ノンバーバル)に分けられる。非言語コミュニケーションは、相手を意識しているものやそうでないものを含めてその時の自分の気持ちや要求、訴えが何らかの行動や動作に表れる。言葉をうまく話せない自閉症児の場合、当初その動作・仕草は、見逃してしまうほど軽微なものであるばかりか、意思と全く反対の意味を表す動作(一般的に)をする場合があるので、自閉症児にかかわる周囲の人々が個々の自閉症児のライフスタイルを熟知しているに越したことはない。しかし、当然、慣れ親しんだ学校や地域以外での生活が余儀なくされることもあるので、一般の人々の

意識改革も必要だが、自閉症児のコミュニケーション手段を質・量ともに高めていくことや非言語的な動作や表情も意思と合致させていくことも大切である。

言葉が出るまで、言葉の意味がわかるまで非言語的な手段を受け入れつつも自閉症児は発声機能の器質的なものに問題がないという見地から、幼児期、児童期はなるべく言語を発声させるようにしていくことが言語発達上望ましいと多くの保育教育現場は考える。では、具体的に療育現場では、どのような理論を裏付けにして自閉症児とコミュニケーションをとり、言語の指導をしているのだろうか。自閉症児の療育方法は、現在日本に20以上あると言われているが、今回は、主に文部科学省の自閉症児教育研究指定校における実践を分析する。

## 2. 研究方法

・文部科学省の研究指定校で、3歳から18歳までの自閉症児330名を療育している、私立A学園の療育記録から言語コミュニケーションの発達について考察する。

A学園の自閉症児の全体的なプロフィールについて、知的障害者福祉に基づく「療育手帳」の度数は、最重度が1～2%と少なく、重度が約25%、中度と軽度がそれぞれ36%前後である。軽度のさらに1/2は「高機能自閉症児」の診断がつく。高機能自閉症児のほとんどは、一般的な田中B式（動作性）知能検査でもIQ75以上を記録する。中には110以上を示す子どももいる。以上のように様々なタイプの自閉症児が在籍しているが、最重度・重度の子どもが少ない理由は、大きく次の2つが考えられる。1つ目は、全体の90%以上が幼児期からの早期療育を行っており、その教育効果が表れて成長したため。2つ目は、私立であり、学校見学をしてから入学を希望するため、重度の子どもの保護者との教育方針が合わず入学を敬遠する

（トレーニングを重視する学校である）ことがある。

・自閉症児の言語指導についての先行研究文献・資料からの考察を上記に含める。

## 3. 考察

自閉症児とは障害を異にするが、先天性の脳障害という点で多少の共通性のある脳性まひ児の発声・発語表現の発達について、国立特殊教育総合研究所の渡邊章氏は、「1）ごっこ遊びを行っていく中で自発的な音声表現に拡がりが見られるようになり、自分から周囲の人に働きかけようとする積極性が見られてきたこと、2）日常生活の中で、本児の発声可能な音声の活用を促すことによって、発声・発語表現にかなりの拡がりが見られたこと、3）コミュニケーション・エイドを利用することによって、文字と音の対応関係についての理解が促進されたこと、4）家庭や学校で、本児が音声模倣をしやすいように配慮したかわりを行っていく中で、本児の音声表現には大きな拡がりが見られたこと、が明らかとなった。」と記している。自閉症児においても指導上の類似点が報告されているが、ここで具体的に考察していきたい。

### 1) 言語獲得について

相手が一番わかりやすいコミュニケーション手段が言語である。言語獲得について、A学園の創立者は、著書の中で次のように独特な表現を用いて述べている。

「自閉症児は、言語発達が非常に虚弱であり、言語機能の連絡線が弱かったり、心に掛かる重圧で言葉が出なかったりする。逆に、言語の表現能力が乏しいために生活をいびつにし、リズムのない生活にしている。自閉症児に言語を獲得させようとする場合、単に言語だけ教えても言葉は出てこない。はじめは着替えもできず、自分で靴も履けず、活発に遊べない子の場合、まず、基本的な

生活習慣を付けるようにして生活の自立を養う。自分で自分のことができるようになると自信が付き、遊具に触れて遊べるようになり、遊びの中で、つまっている『気』を発散できるようになる。こうして生活全体が膨らんできて、言葉が出るようになるが、教師の日頃からの言葉がけも大切である。はじめは短い単語（例えば「はい。」など）を言えるようにし、次に日常の挨拶、要求語を言えるようにする。言語の出にくい子どもは動作でできるようにし、同時に言語指導（口形づくりなど）も行う。こうしてさらに2語文や助詞を使って言葉が言えるようにし、さらには簡単な質問にも答えられるようにする。ついで対話・会話へと発展させていく。」というものである。

この考え方は、「ホールランゲージ (Whole Language)」の考え方を基にしていると思われる。つまり、全ての行動がコミュニケーションの行動だから強化してあげようということである。たとえば、指さしでも表現できれば受け入れてあげる。子どもはせっかく指さして示したのに要求が満たされないのでは「コミュニケーション」行為への意欲を失う。だから受け入れてあげて、動作や口形模倣で「ください」ということができるように教えると良い。このように「コミュニケーション」しようとする気持ちを高めてあげてから、言語につなげていくことが有効であるということである。この考え方のバックグラウンドに、教育方法ではないが、社会福祉援助技術でいう「ケースワーク」、「グループワーク」的な考え方があるように思う。

## 2) 具体的な対処および指導について

### (1) 指導や対処をするときに必要なこと

#### ①要求する気持ちを高める

生活の幅が広がること。自分の殻に閉じこもり、頭の中で何かを描いては要求する必要がない。楽しい体験を積ませることで生活の幅を広げる。つまり、欲求の増大は、自主的行動

を促すことにつながる。

#### ②要求しなくてはいけない環境づくり

要求を自力で満たしてしまえないようにする。例えば好きなものが見える所にある場合、自分では取れない状況をあえてつくる。

#### (2) 発声訓練などをする前提条件

①注目……………相手を見ることが対話の始まり。

②模倣……………口形模倣から始めるにしても、「まね」ができなければ何もできない。まずは、粗大運動的な模倣ができることが必要。

③着席……………落ち着いて（授業に）臨めなければならぬ。

④ラポート…心の通じ合いがなければ何も受け入れてもらえない。

以上のことが最低ラインとして存在しないと指導や対処が円滑に伝わらない。

## 《言葉のない子どもへの指導》

「発語がない」という状態の臨床的に考えると、「自閉的傾向」以外にも、①器質的に音声言語を獲得するのが困難②かん黙③気管切開④聴力障害などがあるが、医学的に明らかに発語が不可能な状態の子どもは、ここでは考えない。自閉症の障害の程度に関係なく効果的な指導の鍵は必ずある。例えば自閉的傾向の強い子どもでも自分の大好きなものを目の前に出されたときに、そのものと同時にそれを提示している相手に注意がいつている。また、好きなカセットテープを聴きたいが操作ができずにカセットデッキを触りながら周囲の大人の顔を見ていることや、大人の手を引いて操作させようとするいわゆるクレーン行動などがよく観察される。日常そのような動作を見逃さずにコミュニケーション指導のきっかけをつかみ、その入口を徐々に広げていき、人とのかかわりの楽しさと伝達の成功感を与えていくことが効果的であるようだ。

発語のない子どもへのコミュニケーション指導

は、音声だけにこだわらず、あらゆる手段・機会を利用して伝達や理解を高めていくことを目標にする必要がある。例えばサイン・ゼスチュア（ちょうだいのとき両手を合わせるなど）、絵カード・PIC（視覚シンボル）、声が出るコンピュータ等々。これらのように言葉だけに頼らないコミュニケーション方法をAAC（補助・代替コミュニケーション）というが、自閉症児に限らず多くの障害児がこのAACを使用しながら言葉を指導することで発声が増えたり、発語が可能になったという例が増えているという報告が日本特殊教育学会（1998年第36回大会、東京学芸大学 伊藤ら）でも報告されているが、発語のきっかけづくりとしてもこのアプローチは有効だと考える。

### 1) 簡単な指示に従える、指示が理解できる

指示に応じられるかを判断するとき、専ら子どもたちがこちら（大人）からの指示を理解できるかどうかを問題にしがちであるが、人と人とのやりとりが成り立つかどうかは双方の問題であり、思い通りにいかないとき、その原因を一方に帰することはできない。

子どもがこちらの指示に応ずるということは子どもにとってみれば、今起こしている行為をやめて、行動を他の方に向けるということである。その時に必要性が見出せれば問題はないが、多くの場合は難しい。それには2つの理由が考えられる。1つは、指示されていることが自分の内部状況になっていない（もしくはわからない）。2つは、今行っている行為を止めるのは嫌だ（もっと続けていたい）ということである。

では、いかにしたら簡単な指示に応じられるようになるかという、指示者がその子どものこと（性格や普段の行動パターン）をよく知ることが一番である。また、背景として集団の中で、友だちどうしの関わりのなかで変容してくることも多い。

1つ目に関しては例えば「トイレに行こう。」に応じやすいのは子どもが丁度小便をしたいとき

であるし、「おやつにしよう。」に応じやすいのは空腹の時である。というように子どもの生活サイクルを知っていると指示がタイムリーになる。さらに、子どもに手伝いをしてもらおうと思えば場所や内容がわかるところで働きかけると応じてもらいやすい。

2つ目については、指示する側が子どもが現在やっていることよりも魅力的な雰囲気を設定することである。環境設定を子どもが受け入れやすい（わかりやすい）状況にすることである。その環境設定の際に、子どもが新たな世界を広げられる要素を挿入して視野を拡大させることも必要である。それには、はじめは今理解していることから始めると受け入れられ易い。

また、指示をどこまで理解しているのかをすることも大切である。「さあ、給食にしましょう。」という言葉聞くだけで、自分から水道に向かって手を洗い始める子どももいれば、ただ棒立ちの子どももいる。前者は「給食」と聞いただけで「手を洗う→お盆を出す→箸やコップを用意する→給食を配る→食べる」といったルーチンを思い浮かべることができるが、後者は、ルーチンの成分（手を洗うなど）・要素（水道に行く、水を出すなど）の一つひとつの指示をしないと動けないのである。よって、どの手段によって指示理解がなされるかを評価する必要がある。その段階は、①言語のみ「手を洗おう」②かけ声・擬態語「手をゴシゴシしよう」③指さし・ジェスチャー④モデリング⑤身体援助の5段階がある。指導の原則は、子どもの評価の一つ上のレベルで働きかけることである。こうして生活やイベントなどのルーチンを理解することを通して「言葉の理解」がなされていく。さらに言うならば、集団の相互作用を利用すると良い。

### 2) 動作模倣、音の模倣

まず、個々の粗大運動（の模倣）からの取り組みが必要である。また、子どもは多かれ少なかれ

独占欲や嫉妬心を持っており、それらを利用して学習の向上や発展につなげていくことが効果的である。

動作模倣ができるということは、口形の模倣もできやすくなるということであり、発信者と受信者の間の相互交流がなされていくことにもなる。他者の行為をモデルに同じ行為ができるためには他者の身体の各部位と自分の部位が対応して同類であること、同じように動かすことができると理解していることを意味する。それは言葉の発声においても同じことが言える。

また、大人が子どもに聴かせるために太鼓をたたく行為、この操作と結果の関係を考えると、大人の行為が太鼓に向けられていると同時に子どもにも向けられている。子どもはそのことを感じるによって大人を意識して大人に音を返すことになる。音のキャッチボールは会話のキャッチボールになる。子ども自身の中に、手や体を使ってものを操作する能力を育て、物を介して子どもとのやりとりをする遊びも発語に向けての有効な手段である。

絵描き歌は、視覚優位な子どもでも聴覚優位な子どもでも興味を引きやすい教材である。描いてみたい、歌ってみたいという気持ちを引き出し、大人との相互交流を持ちやすい。

幼い子は大人の真似をすることで成長していくことを認識することで、大人のあり方を振り返ることもできる。

### 3) 身振りや声で要求する

自分の要求のそれぞれに異なる身振りや発声を結びつけ、それを他者に示すことで他人をコントロールできることや、同様に他人の身振りによってコントロールを受けること、自発的にそれを使いこなすことなどを学ばなければならない子は多い。言葉のない子どもにとって身振りを使うことが子どものやりとりを円滑にするのに有効な道具である。例えばトイレに行きたいときに、下腹部

を押さえて合図してくる子やクレーン行動をしながら「うー」、「あー」などの発声をすることによって意思を伝えてくることがある。その時に適切に言葉を教え、発声させることで発語が可能になったり、コミュニケーション時のサインとして使えるようになった例は多くある。

身振りの指導のポイントは、はじめは身振りの型から始めるのではなく、子どもが既に持っている動作から始まるか、子どもができそうな動作から始めると良い。しかも、子どもの内部状態と密接に関係して、しばしば見られる特徴ある動作を利用する。そして大人も、身振りと言葉を同時に働きかけるとともに、子ども自身が身振りの型を作るのを助ける。発信者と受信者が互いに応答し合うことが認識できてきたら、よりノーマルなものに変えていく。

相手に近寄って、何かを伝えたいという欲求を持たせる環境づくりが大切である。

### 4) 身近なものやことばのつながりを教える

言語発達の初期段階にある子どもは、「りんご」という言葉を聞いても「もの」や「ことがら」を頭の中に概念として浮かべることができないので、絵カードなど半抽象的な教材を使ってものの名前を教える前段階として、身近な実物を見たり触ったり使ったりして、その物の機能や性質、「ものどもの」、「ものど行動」、「ものど相手」との関係を理解させていくことが大切である。

次の段階では、車に興味を持っていれば車から、動物が好きならば動物からというように、興味のあるものから半抽象的な絵カードを使ってマッチングをする方法が良い。そして、日常生活に必要なもののマッチングにつなげていくが、そのとき単にマッチングをさせるだけでなく、口形を作らせ発声を促すことも並行すると良い。

#### ①行動を通して理解力を育てる

「鞆を開けて、ノートを出してちょうだい。」と

言ってもできない。はじめはやはり、一つひとつの動作を分解し、その都度言葉や指さし等の介助を与えながら行為を完遂させていく。

「チャックを開けよう」→「(手を添えて) ここを持って」→「(ノートを指さして) 引っ張り出して」→「(手を重ねる動作をしながら) ノートをちょうだい」

物を自分の手にとって、相手に渡すという行為を通して、相手の存在や要求と言葉の結びつきを理解していく過程であるが、完全に習得するには個人差がある。

## ②模倣する力を育てる

相手が、バナナを指して「バナナ」と言ったら、「バナナ」と相手の言葉を模倣することで発音を覚えていく。前述のように動作模倣から入って、発声・口形・発音の模倣を意図的に指導することができる。

## ③話し手に注目する力を養う

自閉的傾向をもつ子どもは、多くの刺激の中から必要なことに注目したり、一定時間持続して注目することが困難であるので、周囲の気になる刺激を軽減したり、ポイントを押さえた簡潔な提示・言葉がけ、さらに幼児には絵描き歌などのアプローチが大変有効である。

## ④興味を持たせる

興味や関心のない物は、そこにあってもないのと同じである。形や色、音などを工夫したり、友達からの刺激が受けやすい(集団の利点)ようにすることで積極的にかかわろうとする気持ちを育てる。その意味では言葉は遊びを通して獲得されていくことが多いと思う。ただし道具を使って遊ぶようになるにも時間がかかり、指導も必要な場合が多いので、一緒に関わりながら言葉がけをしながら楽しんで覚えさせていく。

## ⑤毎日繰り返し経験させて定着をはかる

「ゆっくり・はっきり・簡潔に・同じ言葉(単語)で」をキーワードに毎日体験する行為に必ず言葉を添えてあげると良い。繰り返し聞かせ、繰り返してできるだけ多くの「言葉体験」をさせることである。

## 《言葉を伸ばすための指導》

### 1) 語彙がなかなか増えない子どもに

語彙の少ない子どもは、新しく入った情報を記憶するとき、情報の特徴に基づいて分類・整理し、ネットワークのなかに組み込むことが苦手な場合が多い。つまり、ある物事の特徴を捉えてカテゴリーに分けたり、グループ化することが難しいのである(例えば、リンゴやミカンが同じ果物の仲間であると気づかない)。

健常の子どもは、ある概念を表す言葉が使われる場面を何度も経験しながら、概念と言葉を結びつけていく。つまり、人が言葉をどのような場面でどう使うかについて人とのかかわりの中で学習している。

語彙の少ない子どもは、言葉で伝えることが少なく、動作や発声で表現する。このような子どもからの発信は弱いことが多く、大人からは見逃されがちである。そのため大人が敏感になって受信しなければ、やりとりの経験は少なくなる。また、子どもの発音が不明瞭でうまく伝わらない場合、言葉で伝えることが楽しくないと感じてしまうことがあるが、この状況はぜひとも避けるべきである。

また、子どもの表現できる言葉が少ないために、大人が話しかける時に子どものレベルより低いレベルの言葉を使用してしまい、適切な言葉の刺激がなくなってしまうことがある。子どもの語彙が増えるような働きかけが大人に求められる。

### ①概念の拡大

概念を育てるためには物を実際に扱って、五感

を自分で体験しなければならない。さらに人を介して物を介してかかわりを深める中で概念が拡大される。

## ②記憶を助ける工夫

概念や言葉を記憶するときに、類似点・相違点・関連性などに注目した分類・整理や組織化がうまくできず、記憶のネットワークが作りにくくなっている。そこで、果物・乗り物・身につける物・音が出る物・色・洗面の時に使う物・掃除に使う物・季節の行事・遠足関連など、それぞれの仲間分けする絵カードを使った学習や広告を切って分類しノートに貼らせる学習などを行い、ネットワークづくりを行う。

## ③言葉で伝える場面設定

楽しい雰囲気や興味のある活動の中では、比較的積極的に言葉で表現することができる。子どもの興味のある題材や遊びの要素を取り入れた活動をすることで、言葉で伝える場面や経験を増やすことができる。例えば「ごっこ遊び」や劇遊びなどができれば望ましい。また、一例として、家族旅行の事前に行くところの写真やビデオを見ながらイメージを作ると当日や帰ってきてから言語活動が活発になる。

## 2) エコラリア（オウム返し）の子どもに

人間の発達上、健全な子どもも時期は短い、オウム返しをする時期がある。自閉症の子どもはこの時期が長いことが多い。同じ言葉を繰り返されたり、意味のわからないことばを話されると聞いている方は戸惑ってしまう。しかし、言葉のオウム返しは発達に遅れのある子どもにとって通過しなければならない必要な発達段階であり、何かを言ってくれることは、聞く側にとって意味を探る手がかりにもなる。

オウム返しには2つの種類がある。1つは、即時のもので質問の言葉をそのまま返す。もう1つ

は遅延のもので、突然テレビコマーシャルを言い出したり、「走ってはいけません。」などと言いながら走っているなどの例である。

子どもの「やり・とり」の中でオウム返しの反応が出た時は、こちらからの質問や指示が理解されなかったと考えるのがほとんどの場合妥当で、正常な言語発達過程を考える時、言語表出の基礎には言語理解という土台が必要であることを十分認識しておく必要がある。

オウム返しをする子どもは順調に成長した場合、言葉の自発性や反応性が乏しい段階→オウム返しが多い時期→こだわりに関係した時期→上手に応答でき、話ができる段階に至る。少し時間がかかるが、オウム返しをしたとき、それはこういう意味だね。と返してあげることが大切である。語彙の知識が増え、文の形を覚え、正しく応答するようになる。繰り返すが、オウム返しをしたら、その意味をうまく推し量り、正しい言葉の手本をきちんと与えてあげることが大切である。「うまく推し量る」ためにはその子どものことをよく知ることである。

## 3) 独り言が多い子どもに

独り言を言う子どもにも、会話として「使える言葉」を持つケースと持たないケースがある。前者は状況に関係なく、自分の好きなこと（電車やテレビ番組）を話し始める。簡単な会話は成立するが、要求以外は自分から働きかけることは殆どない。後者は相手に伝達する手段として言葉を使用できないケースである。

独り言に対して直接働きかけるとともに、できるだけ早く表現能力を高め、取り組める活動（お手伝いなどの活動）を増やしてあげることが必要である。スケジュールを決め無意味な時間をできるだけ無くし、10分、15分の時間の使い方を工夫できる能力を身につけることである。

同じ子どもの独り言でも場面によってその意味するところは違う。例えばその場の状況に関係な

く機嫌良く独り言を楽しんでいる場合がある。そのような時は、それ以外にすること、できること、興味関心が持てることがあるかを確認、ある場合にはそちらに注意を向けるよう促す。ない場合にはそうした（意味のある）活動を日常生活の中で形成することから始める。それには日課として毎日の生活にしっかりと位置づけることが肝要である。

また、時に不安げに落ちつきなく独り言を繰り返すことがあるが、その原因がわかる場合には当然それを取り除いたり、軽減する必要がある。しかし、それは根本的な解決にはならない。やはり、生活経験を積極的に積み重ね、「知らない、わからない」ゆえの不安をなくしていくことである。新しい体験や予定の変更は、事前に子どもにもわかる方法で伝え、先行き不安を取り除くこと。行動の因果関係を子ども自身に体験させることは、言葉や社会的能力を高めていく。

#### 4) 一語文から二語文で話せるようにする

二語文の表出は、健常児では話せる語彙の総数が50、動詞数10前後の時期（1歳6か月から2歳）である。自閉症児は10前後の動詞を獲得していて、かつ、伝達機能（欲求・叙述・質問・応答など）が分化していることが二語文の指導の前提である。

子どもと対峙したとき、どの構文が言えないのかの確認が必要であり、その上で獲得のし易い構文から指導を始める。

主格+いた・あった、主格+述語動詞（車来た・わんわんいた・コップあった）、対格+述語動詞（ジュース飲む）などから始め、位格+述語動詞（車に乗る）、具格+述語動詞（お箸で食べる）と続けていく。

子どもが一語文で伝達してきたら、二語文で応答してあげるということを日常生活の場面の中で行うとともに意図的に場面設定をして繰り返し行うことが必要である。教育現場で行っている生活

劇はとても有効で、この生活劇では、要求や選択する場面などの設定も子どもの発達段階に応じて行っていく。

#### 5) 聞いたことを伝えられるようにする

学校を卒業して就職したら、会社ではいちいち連絡帳に書いてくれない。職場と家庭を結ぶのは、子ども自身の伝言によるものになる。そこで社会に出る前に家庭、学校でその練習をする必要がある。学校生活では教室から色々な場所にお使いに出す場面を多く持つことができる。また、教室内では伝言ゲームなどをして遊びながら学んでいける。さらに家庭との連絡を口頭で伝える練習に入れる子どももいる。ただし、この場合担任と保護者間の内容の確認が必要である。

#### 6) 自分の経験を話せるようにする

記憶はとても曖昧なものである。今言われたことでも、一歩歩くと忘れてしまった経験は健常児者でもある。忘れたら思い出せるように周囲の大人がうまく誘導して思い出させることを繰り返す必要がある。

はじめから、きちんと順序立てて話をすることは健常者でも難しいものである。そこで気楽に話せる雰囲気をつくる（相づち、感心、驚き）ことはもちろんのこと、話のポイントとして、5W1Hを押さえることで話が明瞭になり、精度も増し、手紙を書くときにも役立つ。そのための日記指導は有効で、A学園の自閉症児は全員が日課として行っている（子どもによっては保護者と一緒に書く）。

周囲の大人が、体験や最近の写真やビデオ、連絡帳などをもとに話を上手に引き出して聞き上手になることである。

#### 7) 自分の感情を話せるようにする

自閉症児に限らず、「ありがとう」「ごめんなさい」「おはよう」「さようなら」などの日常的な言葉も



感情表現と考えられ、これらの言葉（言葉がなければ表情や動作）は人と人との関係を友好的に保つために不可欠である。人間関係をつくることの苦手な子どもたちであるので、なおさらしっかりと見える、表現することができるようにしたい。

拒否や要求の言葉は、感情表現の基になるので経験するその場その場において、丁寧に指導する。

#### 《就職時に周囲の人とのコミュニケーションを高めるために有効な言語や行動》

一般企業就労において言葉を話せることが一番重要なことではない。第一はまず、生活自立・情緒の安定であり、集団適応力や周囲の人との良いコミュニケーションがとれることである。つまり、言葉が無くとも良いコミュニケーションがとれていれば問題がないのである。しかし、言葉は意思伝達の最も有効な手段であり、本人のストレスが溜まることを防ぐなど確かに便利なことが多い。また、言葉のある子どもでも繰り返ししつこい質問をして職場の人に嫌われるケースも多々ある。つまり、言葉を習得しても良いコミュニケーションがとれないと社会では難しく、就労が長続きしない。言葉を健常児に近い感覚で話せる自閉症児も、正しい言葉の使い方、失礼のない言葉の使い方を指導する必要がある。特に彼らは失礼かどうか理解しないで話していることが多い。

言葉がない、または発声はできるが言葉にならない、会話はできないという自閉症児も職場の人々に可愛がられてスムーズに働いているケースも多い。そのケースに共通して持っている能力は、言語理解力である。また、言葉以外のもの（培われたまじめさ、表情の明るさ、謙虚さ）で良いコミュニケーションがとれている。また、保護者が時々職場に出向き、子どもの様子を上司に聞き、弱い部分のフォローを適度にされているとのことである。障害児の場合は就労すれば親や教師の役割は終わりということはないのである。

東京都が自閉症児を含む知的発達障害者を雇用

している企業を対象に調査したデータには、コミュニケーションに関わるものが多くある。会社の集団行動にはルールがあり、そのうち最低限のルールがエチケットであるとのこと。B株式会社の管理職の要望として以下のことが出ている。

#### 1) 挨拶の励行

朝は挨拶から始まる。職場には時間前に入る。欠勤・遅刻・早退は事前連絡を。

#### 2) 不要な私物を職場に持ち込まない。

#### 3) 自分の気持ちを口に出せるように。

#### 4) 返事がきちんと出来るように。

「はい、できました。」「わかりました。」

#### 5) 嘘をつかないように。

#### 6) 自分の身の回りの整理・整頓ができるように。

#### 7) 健康に留意できるように。

他にも、「集中力が散漫」、「嫌な仕事は避ける」「自分勝手に行動する」などが無いことが一般（企業）就労の条件である。

まとめると、コミュニケーションの観点から、職場に必要なことは、挨拶、連絡、意思表示、返事、嘘をつかないことが大切である。

次にやはり東京都が知的発達障害者を雇用している企業に調査したデータの中で、「社会参加への志向性」というものがあり、その中でコミュニケーションに関する項目を紹介する。それには項目ごとに4段階に分けた行動例が載っており、それぞれ最高段階（第4段階）なら一般就労は問題なく出来、第3段階だと「障害者に理解ある職場なら就労可能」という目安である。

#### 1) 「コミュニケーション」

※この項目は言語的なコミュニケーションしか記述されていない。

第1段階 意思疎通ができない。

第2段階 質問されれば何とか答えられる。

第3段階 意思を伝えたり、質問や報告も出来るが、不十分なため補足が必要である。

第4段階 必要に応じて質問や報告が出来、意思を伝えることが出来る。

## 2) 「日常の挨拶」

第1段階 自分から挨拶ををしない。相手がしても応じない。

第2段階 相手がすれば応じるが、自分からすることは少ない。

第3段階 時々挨拶を忘れる。

第4段階 必要な時に適切な挨拶ができる。

※幼少期からの習慣が大切である。たとえ明瞭な発声でなくとも動作や仕草で挨拶の意は伝わる。また、「電話の利用」ができることも現代では大切なコミュニケーション手段の一つである(就労後は、仕事の道具としての要素は強い)。電話操作自体はパターンがあり、自閉症児は比較的得意な分野であると思う。

## 3) 「上司・先輩への対応」

第1段階 目上かどうかの区別がつかない。あるいは無視・拒否・反抗などの態度が見られる。

第2段階 目上の人に対して、同僚と同様の接し方をする。

第3段階 目上の人へのマナーを一応わきまえているが、忘れてしまうことがある。

第4段階 目上の人に対して、適切な敬語が使えたり、マナーをわきまえた行動が大体とれる。

※この項目は大切である。相手が上司・先輩なのか同僚なのかの区別が難しい自閉症児は多いが、相手が誰であれ失礼のない振る舞いや行動がとれるように指導することは、時間がかかるかもしれないが継続して意識させていけば見つけることである。また、一般就労を目指す子どもには身につけさせなくてはならないことである。

障害者の就労についての講演を聴くと、必ず講

師は保護者や教員に対して、「どうぞ可愛がられる子どもに育ててください」と言う。これはそういうタイプの子どもが職場で長続きしているという絶対の事実があるからである。

可愛がられるという点では、好感の持たれる言葉遣い(おばさんでなく、おばちゃま)、清潔感(服装、みだしなみ、きれいに食べる)などがポイントが高い。

他に就労に対して「協調行動」という項目がある。「協調行動」は、ある意味自分の意思を抑えて、我慢して、という部分が強い。お節介も嫌われるが本人は好意でやっていることが多い。しかし、その時の状況が把握されておらず、間が悪いのである。広義のコミュニケーションの領域かもしれないが狭義の社会性や対人関係の部分であろうかと思う。

最後に、自閉症児は「非社会的行動；自殺企図、過食、自傷、ひきこもりなど」をとることがある。環境が変わると集団行動が急にとれなくなる傾向が健常児よりも強くあるので、児童期のうちからいつも同じ環境(場所、人間)の中にいるのではなく、子どもの行動範囲を広げていく必要がある。

## 4. 結論(まとめ)

1) 言葉の出る可能性のある限り、代替言語だけに頼らずできるだけ発声させていくことを考える。ただし、自閉症は症候群であり、個人差が大きいので個人個人の目標はそれぞれ設定しなければならない。

2) 個別のアプローチに加えて、自閉症児の生活全体を豊かにすることが、言語面の成長を大きく促進する。周囲の者は、言語の必要な環境づくりに努める。

3) A学園のようにシステムティックな統合教育によって、年齢相応の健常児からの言語刺激を受けて、言語が成長する場合が多い。発語数、表現の巧みさ、イントネーション、言語理解力などが向上した例が多い。

4) 療育現場の担任と家庭の保護者との日々の連携が不可欠で、年間カリキュラムに基づいた月ごとのカリキュラムが必要である。

また、家庭における日記指導が言語指導として効果がある。

5) 周囲の大人を含む者が、常にコミュニケーションマインドを持って接することが肝要である。

### 参考・引用文献

高田隆、計野浩一郎 「第3回 武蔵野東教育研究所主催 保護者のための自閉症教育講習会『自閉症児者のコミュニケーションを考える』 発表資料」 1998、武蔵野東教育研究所

高田隆 「平成5年度 国際協力事業団(jica) 帰国専門家 業務報告書 『自閉症児教育法』(ウルグアイ東方共和国)」 1994

高田隆 「Child Development and Research」 International Conference on Autism in Boston, June 26, 1997, Boston Hihashi School

北原キヨ 「自閉児のための生活療法百問百答」 たいまつ社

東京都心身障害者指導センター編 「知的発達障害者への理解を深めるために」 1996

渡邊章 「発声・発語表現に拡がりが見られた脳性まひ児の発達過程についての検討」 国立特殊教育総合研究所研究紀要 第23巻、1996

(2001年9月20日 受理)

# A Study of Communication with Autistic Children

Takashi Takada

## Abstract

Autistic children are not good at communicating with people and also known as communication handicapped. However, if you spent an entire year with these children and once their identities became clear, many people would feel that there is not much difference as compared to the children without this type of disorder (e.g., how frequently they intend to have non-verbal communication) though autistic children still would not be good in verbal communications. In fact, many of such cases have been reported.

In general, autistic children are capable of vocalizing their thoughts. It varies substantially how they vocalize what they feel in their mind. For this method, many trials and errors have been conducted. Though not sufficient, approaches for individuals and for groups have been established. One of the methods is to introduce drawings, which are called augmentative and alternative communication (AAC). Occasionally, this method brings a good success.

For this time, we are going to examine a school, where many autistic children attend. This is a designated school of Ministry of Education and Science. Through this study, training steps are defined. First, allow all types of communication behaviors, and gradually develop verbal communications, according to the capacity of an individual.

The development of their verbal communication will be even more notable by accommodating the environment in which they live in, thus increase the possibility to realize verbal communication. In addition, it is essential that adults who are around autistic children should maintain the attitude to facilitate and encourage communications, and provide repetitive trainings, which are typically very details in nature.